

活気と中国製品があふれる街、平壤

ERINA調査研究部研究員 三村光弘

2004年8月3日～9日、第2回世界コリア学大会に参加するため、北朝鮮の平壤を訪れた。第1回世界コリア学大会は、2002年7月に韓国・ソウル近郊で韓国精神文化研究院、国際高麗学会、欧州韓国学会、豪州韓国学会の共同主催で行われた。今年もこれに朝鮮社会科学院を加えた主催団体で行われるはずであったが、北朝鮮が金日成主席の10周年忌（7月8日）に際し、一部の韓国人弔問予定者が訪朝を取りやめたことを理由に、韓国からの参加者の訪朝を拒否したために、朝鮮社会科学院以外の共催団体が共催を取りやめ、朝鮮社会科学院の単独開催となった。その結果、この大会に参加したのは、朝鮮側の参加者と日本、中国、ロシア、アメリカなどの外国人とそれらの国に住む「同胞」たちとなった。



【写真1】
北朝鮮のビザ
（日本とは国交がないため、別紙のビザ
となっている）

北京から平壤まで

今回の訪朝では、北京から国際列車を利用した。北京から平壤に行く国際列車は、1等寝台（軟臥）1両、2等寝台（硬臥）1両の計2両。北京～丹東のK27次国内列車の後ろに併結され、8月2日の17時30分に北京駅を出発した。途中、天津、瀋陽を経由して8月3日の7時30分に国境の中国側、丹東駅に到着した。車内で出国手続きと簡単な税関検査が行われた。国内列車を切り離し、朝鮮鉄道の荷物車を1両増結した身軽な姿で、定刻より20分ほど遅れた中国時間の9時55分に丹東駅を出発した。丹東から鴨綠江を渡り、北朝鮮側の国境駅、新義州までの所要時間は約10分。中国時間と朝鮮時間には1時間の時差があり、新義州駅には11時10分頃到着した。到着後すぐに、検疫と入国審査、税関検査が行われた。外国人に対する検疫は顔を見るだけ

で特に異常がなさそうであればフリーパスだが、朝鮮人は健康証明書のチェックが行われる。同室（列車は定員4名のコンパートメントとなっている）の朝鮮人客一行は健康証明書を持っていなかった。本来なら罰金になるところを、6人の団体に外国製たばこ1カートンで話がついた。

次に税関検査である。中国側の検査と異なり、北朝鮮側の税関検査は荷物をすべて開けて行われる。所要時間約10分。税関検査は紳士的ではあるとはいえ、荷物のチェックがあまりに細かいのにうんざりした。同室の朝鮮人客は、逆に中国での税関検査があまりに簡単なのに驚いていた。列車は非冷房なので、停車中は蒸し風呂のようになる。自分の税関検査を終え、「外で涼んできたら」と税関吏に促され、ホームに出て風に当たった。



写真2 この日の列車は中国の車両（非冷房・ドイツ製）



写真3 新義州駅前の様子（雨が降ったため濡れている）

新義州駅で朝鮮の国内列車を連結し、定刻の13時50分過ぎに発車。20分もしないうちに、列車爆発事故が発生した龍川駅を通過した。駅前の建物はほぼ再建されているようで、真新しい建物ばかりであった。時折雨が降る中、列車は時速50～70キロで平壤に向かう。食堂車で昼食をとった。朝鮮料理の定食で、値段は5ユーロ（約700円）であった。それなりにおいしいが、内容の割に値段が高い。外国人料金だから仕方ない。平壤近郊の一部を除き単線なので、途

中駅で何回か行き違いのための停車をした。平壤駅には約20分遅れて、19時50分頃到着した。

平壤駅には、朝鮮社会科学院から出迎えが来ていた。車に乗って15分、宿泊先のソサン(西山)ホテルに到着した。



写真4・5 第2回世界コリア学大会開会式の様子

第2回世界コリア学大会

第2回世界コリア学大会の会期は8月4日～5日であった。8月4日の午前には全員会議(開会式)があり、内閣副総理が祝辞を朗読した。中国、ロシア等の代表がスピーチを行った。その後、分科会に分かれ、筆者は経済法律分科会に参加した。

経済法律分科会では【表1】のように15の発表が2日間にわたって行われた。発表時間は15分、討論時間は5分を基本としたので、議論を深めるというよりは、講義を受けているような感じであった。発表内容に対する質問に対しては、各発表者ともできる限りの受け答えをしていた。発表内容に関して、個人的に質問に行くと、かなり丁寧に答えてくれる発表者が多かった。海外の機関との交流を活性



写真6・7

玉流館の冷麺。6が普通の平壤冷麺。7がチェンバンクス

表1 第2回世界コリア学大会経済法律分科会における発表一覧

発表順位	氏名	所属機関	題目
1	キム・ジェソ	金日成総合大学	先軍の旗の下に社会主義経済強国建設の跳躍台を作り出した朝鮮人民の闘争
2	リ・ヨンエ	人民経済大学	開城工業地区開発と法律環境
3	リ・キソン	社会科学院	米帝の朝鮮に対する経済制裁策動
4	キム・ミョンウ	国際問題研究所	北南経済協力と民族経済発展
5	ベク・ソンチョル	人民保安省政治大	朝鮮における国際仲裁制度について
6	チン・ムンギル	金日成総合大学	6.15 北南共同宣言と法学者の任務
7	シン・ジンチョル	金策工業総合大学	新世紀の要求にあう産業構造の改善展望
8	チョン・リョンサン	金日成高級党学校	朝鮮における人民経済の現代化、情報化とその実現方法
9	リム・ヨンチャン	社会科学院	朝鮮民主主義人民共和国における外国投資のための法的環境
10	ムン・ホイル	一橋大学大学院	朝鮮の人口統計について
11	ユ・キョンヒ	社会科学院	北東アジア経済発展のための交流と協力
12	アン・ミョンフン	金日成総合大学	国防工業の優先的発展を基本とする先軍時代の経済建設路線
13	チュ・ホジュン	人民経済大学	現在の朝鮮における農業革命の積極的推進
14	ソン・キョンウォン	社会科学院	共和国貿易会社の法的地位について
15	リ・ヨンファ	社会科学院	人民消費品生産における地方工業の積極的役割

化させたいと言う研究者も多く、全体的に開かれた雰囲気であった。

【表1】からもわかるとおり、北朝鮮の主だった大学や研究所から研究者が発表を行っている。発表者は所属の他に、若手、中堅、長老とバランスよく配分されていた。若い研究者はかなり緊張していたようだった。年上の研究者に囲まれているだけでなく、おそらく国際学会で発表する機会はありませんのだろう。元々はこれに加えて韓国の研究者も参加する予定であったので、そうならなければより面白くなっていたのではないかと思う。

平壤冷麺とアヒルの焼肉

大会での1日目の昼食は、平壤冷麺で有名な玉流館に行った。玉流館の冷麺はそばを基本としており、はさみで切らなくとも食べられる堅さでありながら、適度な腰がある。自慢は冷麺の中に入っているスープである。冷麺には普通の平壤冷麺とチェンバンクスとあって、スープが少し濃い冷麺の2種類がある。基本的なコースは緑豆のお好み焼きのようなもの(チジミ)、冷麺、締めにはアイスクリームである。

大会2日目の昼食は、大同江を渡った東平壤にあるアヒル肉専門食堂だった。朝鮮では、ここ15年ほどの間にアヒ

ルを多く飼うようになり、焼肉といえば牛肉よりもアヒル肉を好む人が多くいらいであるとのことだ。確かに、農耕牛なのか、かなり歯ごたえがあり、脂の少ない牛肉に比べ、アヒル肉は軟らかく、焼きすぎても固くならず、脂も多い。海外からの参加者も満足している人が多かった。

平壤の街角 - 日本製が減り、中国製が増える

平壤の街を自由に散策する時間はあまり無かったが、昼食後や行事の合間に少し散歩をする機会があった。2002年9月に訪朝して以来、約2年ぶりの平壤であったが、日本製の中古車が増えている気がした。それも、ぼろぼろの車ではなく、古くなってはいるが状態の良い12,000~3,000ccクラスの乗用車やバンが多かった。日本製の中古車は右ハンドルなのですぐにわかる。(朝鮮は右側通行なので左ハンドル)中国でいつも見かける長春や上海製のフォルクスワーゲンやアウディは目にしなかった。案内員の話では、トラックも日本のキャッチオール規制で大型トラックが輸出できなくなるまでは日本製のトラックの人気が高かったそうだが、現在は中国製などを輸入しているようだ。

2002年のアリラン祭典の時にできた街角の簡易売店は、今回の訪朝時にも健在であった。一般の商店のうち、いくつかは路上に販売台を出して菓子類を売っていた。売店で人気のあるのは「エスキモー」と呼ばれるアイスクャンデー



写真8 玉流館の前で



写真9 街角の売店



写真10 商店の前に出している販売台

(50~100ウォン：公定レートで約40~80円、実勢レートで2.4~4.8円)や菓子類、清涼飲料水など。菓子や清涼飲料水は中国製が一番多く、朝鮮製や日本製のものもある。ただ、炎天下で賞味期限が切れて久しいチョコレート菓子も売っている場合もあり、品質管理が万全とはいえないところもあるので、買う際には商品をよく改めた方がいいだろう。値段は中国製の清涼飲料水(ペットボトル入り、500cc)で800ウォンと一般労働者の月給が2,000~3,000ウォン程度であることを考えると決して安くはない。それでも、買う人がいるということは、何らかの副収入がある人が相当数いるということの意味するのだろう。逆に言えば、朝鮮の中でも貧富の格差が目に見える形で現れてきたとも言えるかも知れない。



写真11
平壤市内を走るトロリーバス(通勤時間帯なので満員)

平壤市内には「楽園百貨店」や高麗ホテルの中の売店など、外貨ショップがいくつかある。数年前まで、それらで売られている商品の多くが日本製だった。しかし、今回の訪朝時には、外国製品のうち、かなりの部分が中国製に入れ替わっていた。特に食品類と衣類は中国製品の進出がめざましい。薬品はロシア製が多かった。2003年の貿易統計を見ても、日本との貿易は3割近い減少をしているのに対して、中国との貿易は4割弱の増加である。朝鮮市場にお

いて、日本商品が減り、中国の存在感がかなり増しているのは明かなようだ。今のところ、北朝鮮国内で販売されている中国製品は、値段の安いものが多く、品質の面では少し劣るものも多い。しかし、今後質の良い中国製消費財が進出するとすれば、もはや日本製を買わなくても十分だ、と朝鮮の人々が判断しない可能性はどこにもない。人口約2,250万人の小さな市場であるが、これまで日本製品が人気を博していたこともあり、日本企業にとっては、失うのにはもったいない市場ではないだろうか。

統一通り市場

今回の滞在中、2003年の秋に開業した「統一通り市場」を訪れた。この市場は、楽浪区域にある常設の自由市場である。国営企業や集団所有制企業の他に、個人も使用料を納めれば販売スペースを借りることができる。ここでは、平壤市が制定した販売最高限度額を超えなければ、価格は売り手と買い手の「合意価格」となる。

売られている商品は、コメや小麦粉、トウモロコシといった穀物、肉類、魚、野菜、衣類、簡単な家電製品、石鹸や洗剤、タイルなど家の補修に使う材料など、生産手段とならないものなら、基本的に何でも手にはいる。値段は国営商店より高いが、お金を持っていれば好きなだけ買うことができる。例えばコメは1キロ400ウォンが限度額として定められていた。味の良いとされるコメの場合は実際には1キロ670ウォンで取引されているものもあった。小ぶりなスイカ1個6,000ウォンなど、一般的な労働者の月収をはるかに超える値段のものも多い。しかし、市場の中は人があふれ、商人のポケットには、5,000ウォン札が束になって入っている。貧富の格差の拡大など、否定的な面も多分にあるが、このようなダイナミックな熱気が平壤市内にも広がっているということは、大きな変化だと感じた。

この統一通り市場でも、売られている商品の多くが中国製だった。特に衣料品や靴など、軽工業製品は中国製がほとんどであった。値段の安いものを仕入れてくるのか、中国の有名ブランド商品などはあまり無かった。中国国内の市場よりも、低価格帯の品揃えが豊富なようである。『朝鮮新報』などの報道を見ると、中国製よりも質がよい朝鮮製の軽工業製品が誕生し、市場でも中国製よりも高く取引されているものもあるようだ。市場での価格の違いがその製品の質を表す、というのは以前では考えられないことであった。北朝鮮ではあくまで社会主義経済の補充として市場が位置づけられているのだが、人々の生活や考え方に対する影響は、単なる「補充」以上の力を持っているのではないかと思う。

平壤から瀋陽へ

帰路は平壤から瀋陽まで、飛行機を利用した。夏の間、中国人観光客を当て込んで、中国南方航空が週2便、瀋陽～平壤線を運行している。この路線は高麗航空も週2便運行しているので、計週4便となる。元々は高麗航空で帰る予定だったのだが、予定が変更になり、中国の飛行機を利用することになった。

日本で発券した高麗航空の航空券(発行会社は全日空)を中国南方航空に切り替えるために、少し早めに空港に行ったが、中国南方航空の係員は出発1時間前になってやっと空港に到着。はじめは高麗航空の航空券は切り替えができないと拒否されたが、発券航空会社が全日空であることを伝えるとOKになった。どうやら、高麗航空の航空券を受け取っても、後でお金を回収するのが困難なようである。中国南方航空の方が運賃が2,000円ほど高いので、差額を徴収すると言われユーロとドルを混ぜて払う。領収証は市内の支店にしか用意していないとのことであった。中国南方航空の係員のOKがでて、搭乗券をもらい出国ロビーへ。出国審査をすませた後に、小さな免税店があった。

待合室でしばらく待つと、搭乗開始。ターミナルから飛行機までバスに乗って向かう。飛行機はMD-82。乗客は100人ほどなので余裕がある。乗客は日本人と韓国人とおぼしき人が数名ずつの他は、中国人であった。飛行機は定刻に出発し、瀋陽に向かう。500キロほどなので、上昇後すぐに降下を開始し、約40分で瀋陽に到着した。